

| | |
|--------------|---------------------|
| 学校名 (児童数) | 大津市立雄琴小学校 (333人) |
|--------------|---------------------|

(本研究に係る問い合わせ先)

所在地：滋賀県大津市雄琴2丁目16-1

電話番号：077-578-1234

【研究の目的， 研究内容】

(1) 研究主題

児童の学習へのつまずきを意識した授業改善に向けて
～算数科における学力向上への具体的な取組と検証～

(2) 研究主題設定の理由

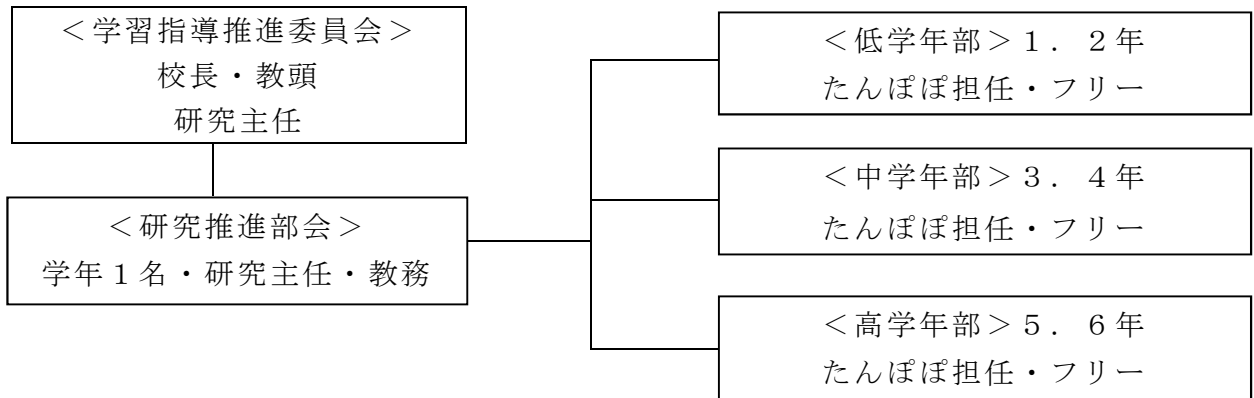
本校では、「自ら考え、学び合う子ども」の育成を目指し、算数科を窓口とした校内研究を続けている。また、平成25年度より、県の学力向上アプローチ事業の研究指定校として、学力向上に向けての指導方法や授業の改善に取り組んでいる。

平成25年度は、「自ら考え、学び合う子ども」の育成を目指して、課題と児童をつなげる課題の提示方法や発問の工夫、児童と児童をつなげる交流場面にするための学習形態の工夫やICT活用について研究を進めてきた。児童が「自分の思いを持つ」ということはできるようになってきたが、全国学力・学習状況調査や学力向上アプローチ事業で行った評価問題の中で、「説明力の弱さ」が目立つ結果となった。

平成26年度には、「説明力」を児童につけたい力とし、年間の指導力点の中に位置づけるとともに、前年度より取り組んでいるノート指導と併せて、「順序立てる・既習の算数用語を用いる・絵や図をつかう」などの説明の仕方の系統化を算数科の授業で取り組んできた。その結果、「ノートの型」がしっかりと児童に定着してきたり、「説明の話型」について意識して説明しようとしたりする児童の姿が見られた。また、授業の中で説明する場面を組み込む教師の姿が見られた。しかし、単元によって「説明」「思考」「技能」と大事にするところが違うため、学年別に児童のつまずきに焦点を当てて授業改善を行う必要性が出てきた。

そこで、学力向上アプローチ事業の3年目にあたる今年度は、児童の学習へのつまずきを意識して、学力向上に向けた具体的な取組と検証を行う一年にしてきた。昨年度末に実施した「つまずき診断テスト」をもとに、学年によってつまずきを明らかにし、重点指導の単元を設定した。また、授業研究会で、児童のつまずきに焦点を当てた授業改善であったかについて全教員で研究を深めてきた。具体的な検証を行うために、児童にアンケートを実施し、意識の変容を分析していくとともに、県算数部会の「基礎計算力テスト」も活用しながら、学年で設定する重点単元の授業改善の結果、児童一人ひとりの学力や意識がどのように変わっていくのかについて全教員で考え、検証してきた。

(3) 研究体制



校長・教頭を含む組織として「学習指導推進委員会」があり、その下に、各学年1名の「研究推進部」を位置づけている。月に1回部会を開く中で、授業の改善・研究授業の計画・反省・算数アンケートの結果分析、ノート指導の確認などの話し合いを行う。

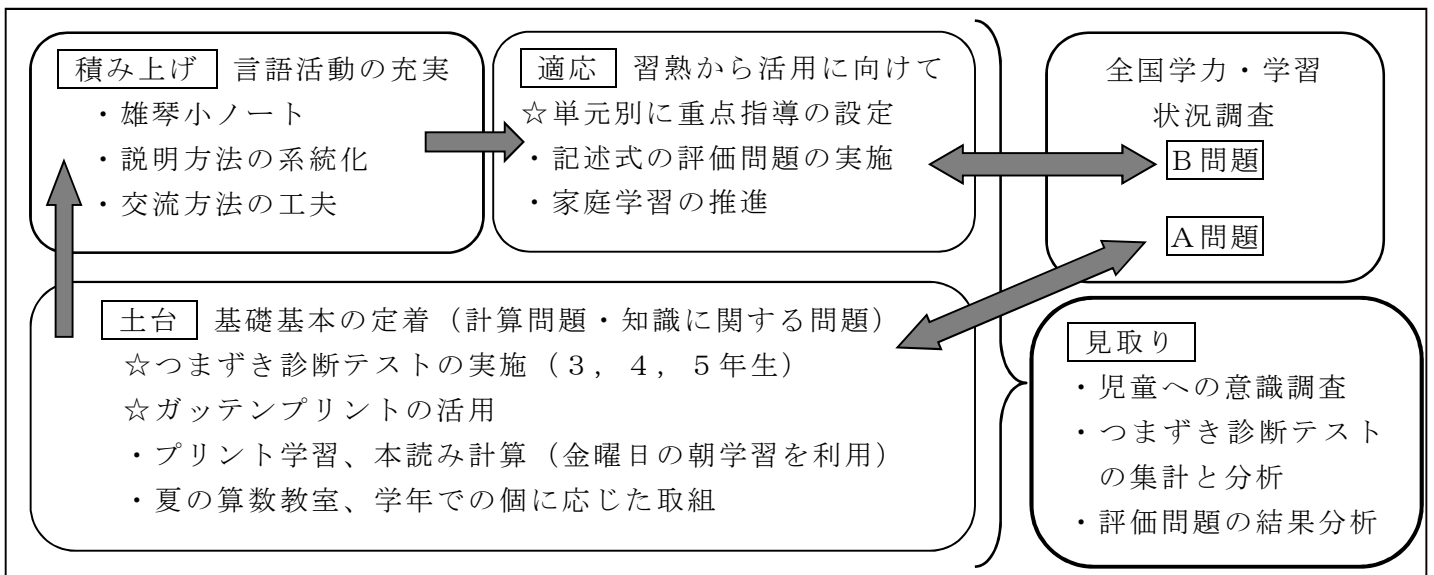
(4) 1年間の主な取組の経過

- ・ 4月21日(火) 平成27年度全国学力・学習状況調査の実施
- ・ 4月22日(水) 第1回学習指導推進委員会
～平成27年度全国学力・学習状況調査の自校採点
第1回校内研究全体会
今年度の研究・1学期の重点研究単元の確認
- ・ 5月14日(木) 第1回授業研究会
特別支援学級 「自立活動」
- ・ 5月25日(月) 第2回授業研究会
4年生 算数科 「折れ線グラフ」
- ・ 6月15日(月) 第3回授業研究会
3年生 算数科 「一億までの数」
(市教育委員会：森指導主事、県教育委員会：大橋指導主事 来校による研究会)
- ・ 7月1日(水) 第4回授業研究会
5年生 算数科 「合同な図形」
- ・ 7月24日(金) 第2回校内研究全体会
1学期の取り組みのまとめ・2学期の重点研究
- ・ 8月24日(月) 第2回学習指導推進委員会
～平成27年度全国学力・学習状況調査の結果分析
「本校の学習課題と指導の重点について」
「全国学力・学習状況調査の活用力問題について」

- ・ 10月23日（金）市の公開授業研究会及び、第5回授業研究会
6年生 算数科 「比例・反比例」
（市教育委員会：森指導主事、県教育委員会：大橋指導主事 来校による研究会）
- ・ 11月17日（火）第6回授業研究会
2年生 算数科 「九九を広げて」
（市教育委員会：森指導主事、県教育委員会：大橋指導主事 来校による研究会）
- ・ 12月 2日（水）第7回授業研究会
1年生 算数科 「かたちづくり」
- ・ 12月 7日（月）～二学期末まで 滋賀県算数評価問題の実施（4～6年生）
- ・ 12月18日（金）ステップアップ事業「学び確認テスト」実施（3～6年生）
- ・ 1月 5日（火）第3回学習指導推進委員会
「学び確認テスト」の自校採点・集計
児童用 算数科アンケート 集計・比較分析
- ・ 2月 8日（月）第4回校内研究全体会
～今年度のまとめと次年度に向けて

（5）具体的な研究内容・方法，研究を進める上での工夫点等

◆研究内容の図式化



◆研究の方法

①基礎的な学力の定着に向けて

- ステップアップタイム…漢字、本読み計算、百字作文
- 夏の算数教室…4年生以上対象 「既習内容の定着・理解」を図る。
- つまずき診断テストの実施、ガッテンプリントの活用
 - ・3、4、5年生において診断テストを実施
 - ・日吉学区基礎計算力テスト結果と併せてつまずきを見取る。
 - ・つまずきが目立つ単元を、重点単元として研究授業で取り組んでいく。

②言語活動の充実に向けて

- 「雄琴小ノート」…ノートの定着と活用を目指していく。
 - ・年度末にモデルとなる児童のノートをコピーする。
 - ・指導ポイントやノートづくりの視点を書きこみ、次の担任へと伝えていく。
- 交流方法の検討…学年によって交流の軸がずれないようにしていく。
 - ・低学年…「伝える」→自分の考えを伝える
 - ・中学年…「広げる」→自分・相手の考えを交流する
 - ・高学年…「深める」→相手の考えを聞いて、もう一度自分で思考する

③習熟から活用に向けて

- 単元別に重点指導の設定（45分間の効率的な指導を目指して）
 - ・単元によって「技能」「説明」「思考」のどれを重点とするのか明らかにする。
 - ▶単元における指導の重点ポイントを一度整理する。
- 記述式の評価問題の実施
 - ・単元の中で一つ設定して評価問題を作る。（今年度の分は見直しをする）
 - ・その単元でつきたい力、課題について事前に学年で話し合い、作成していく。
- 家庭学習の推進
 - ・年度当初に学習のきまりを保護者に配布し、家庭学習の推進協力を図る。
 - 宿題の内容の検討…ガッテンプリントの活用（応用・活用問題を家庭学習に）

④データの見取りについて

- 「つまずき診断テスト」「滋賀県基礎計算力テスト」を実施し、データを集計・分析し、児童の学習のつまずきを見取る。
- 児童用アンケート調査の実施（1、2学期末の計2回）
 - 取組を通しての児童の算数科への意識の変容をみる。

⑤学力向上アプローチ事業についての内容

- 3年目に向けて
 - ・評価問題の実施の対象が4年生
 - ・今年度6年で行っていたものを4年生で実施…「面積」「式と計算の順序」
 - ・評価問題と併せて、その単元の指導案を作成する。
 - ・指導案に沿って授業を行い、単元末に作成した評価問題で成果を見取る。
 - ・指定校で年1回、市の公開授業を行う。（10月23日、第6学年で実施）
 - ・依頼されれば指定校の教員が他校に出向いて、成果を広める。

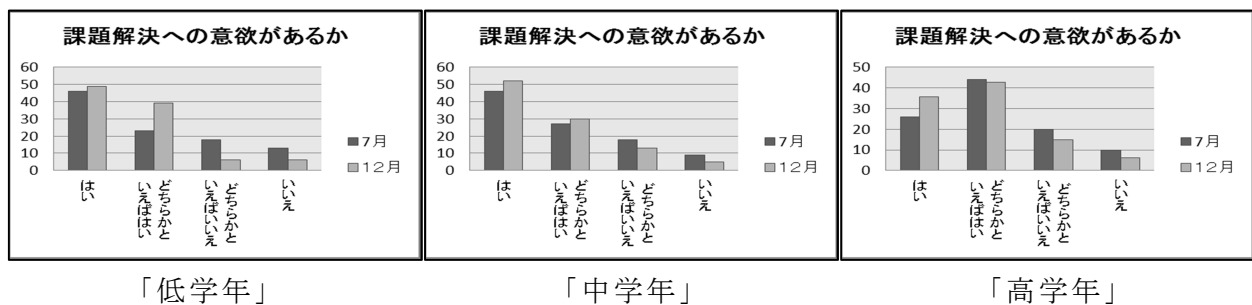
◆研究の進め方

- 研究仮説を設定し、仮説に沿った授業作りに取り組む。
- 部会別の研究推進
 - ・ 研究推進部と学年部が連携し、全体の研究を進めていく。
- 必要に応じて外部講師を招いて研修を深める。
- 公開授業の実施、授業研究会の開催
 - ・ 学年ごとの授業研究会を持つ。
 - ・ 事前・本授業の公開後に、全教員で取組のふりかえりを行う。

【研究成果と課題】

(1) 研究成果

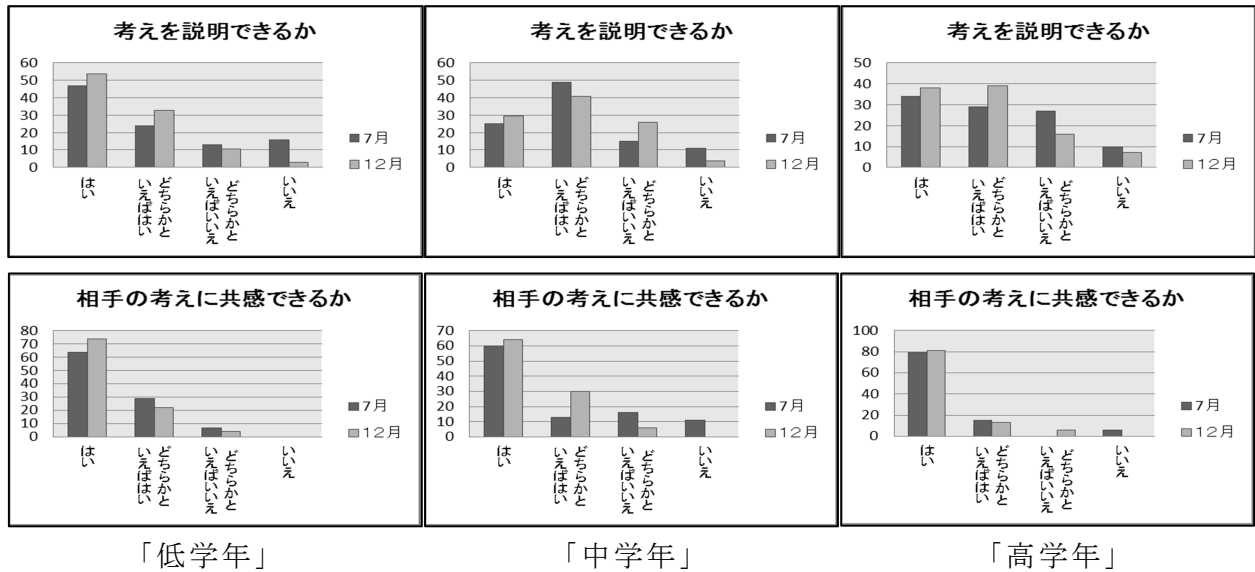
「課題の解決意欲の向上」



算数科アンケートをもとに、児童一人ひとりの学習意欲の変容を見取った結果、低学年・中学年・高学年すべての学年において、「進んで問題を解こうと思うか」という質問に対して、「はい」「どちらかといえばはい」と答える児童の割合が増加した。「いいえ」と答える児童の割合も、1学期と比べて2学期には減少しており、このことから、継続的に取り組んできた「課題解決時の発問の工夫」「課題把握できる提示方法の工夫」の積み重ね、児童一人ひとりの学習のつまずきに対応した学習の積み上げによって、児童の学習への意欲も少しずつ向上してきているという結果が得られた。特に、児童の意見（つぶやき）を拾いながら、授業を組み立てていく学習形式を取り入れてきたことにより、児童一人ひとりが安心して授業に参加できていることが、意欲向上につながっているように感じる。



「交流場面の工夫」

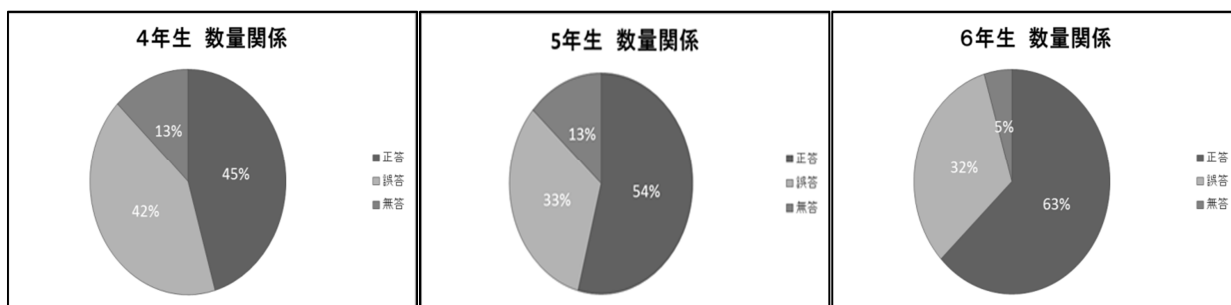


「自分の考えを説明できるか」という質問に対しては、どの学年の児童も「はい」と答える児童は多かった。中には、「いいえ」と答える児童の割合が1学期に多かった学年もあるが、2学期に実施したアンケートの結果では、自分の考えを相手に伝えることにも意欲的に取り組めるようになったという結果が出た。また、「相手の考えに共感して交流に参加できているか」という質問に対しては、児童の多くが「相手の考えを活用しながら課題を解こうとしていること」や、「相手の考えを聞くことで学習を理解しようとしていること」がアンケート結果から見えてきた。自由記述を見ても、「相手の考えを聞くと、自分の考えと比べられて分かりやすい。」「友だちの考えを知ることができて嬉しい。」「自分の考えでは思いつかない考えも聞けて良い。」などの前向きな意見も書かれていた。

このことから、児童の課題に対して疑問に思ったことや調べたいことを「学習のめあて」に設定し授業を展開していくことで、児童一人ひとりの「解きたい」という意欲が高まり、自分の考えをしっかりと持つことにつながるということが考えられる。自分の考えをしっかりと持てた児童は、「友だちの考えを知りたい。自分の考えを伝えたい。」という思いを持って交流に参加できているのではないかと考える。そして、自力解決の時に児童の考えを教師が集約し、意図的指名で児童の考えをつなげながら全体交流をしていくことで、児童一人ひとりが学習をより良く理解でき、友だちの考えの良さに気づくことができているのではないかと考える。



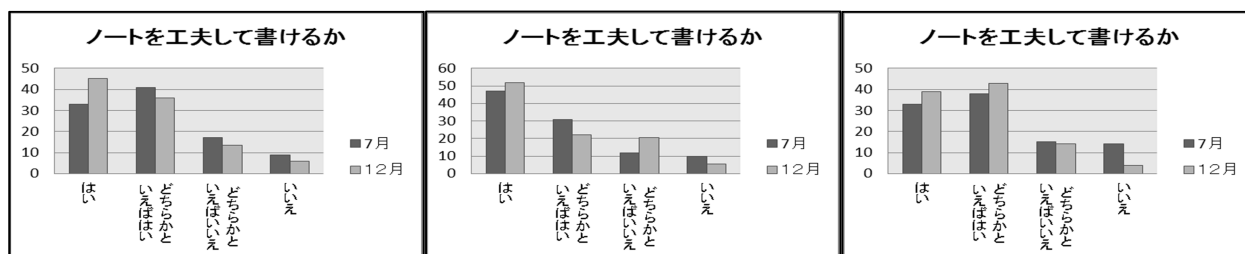
「数量関係領域の学力の向上から見えた成果と課題」



前年度の「つまずき診断テスト」において、「数量関係」につまずきが見られたことから、重点単元に設定し取り組んだことで、4年生以上で実施した「基礎学力診断テスト」で正答率が誤答率を上回る結果が得られた。4月当初より児童のつまずきを分析し、各学年が意識的に単元に取り組めたことで、児童の学習への理解も少しずつ向上してきたように感じる。しかし、無解答率が目立っているため、学力の個人差という点では、成果でもあり、課題として受け取れる結果であった。無解答で終わる児童の特徴を見ると、どの問題も解答しているものが少なく、全体的に算数科の学習に苦手意識を抱いているように感じた。自信を持って学習に取り組む児童が増えてきているが、算数科の学習が苦手な児童の対応に丁寧に取り組んでいく必要性を感じる。

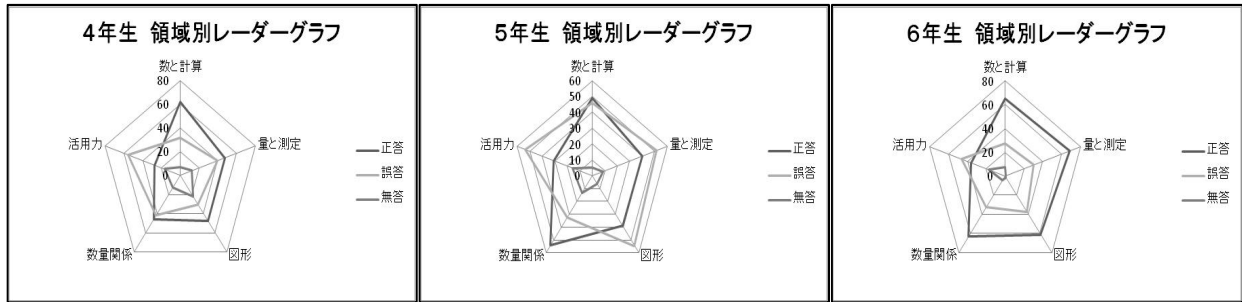
(2) 課題等

「ノートを活用に向けて」



「ノートを分かりやすくまとめることができているか」児童に聞いたところ、「はい」と答える児童が多かったものの、「どちらかと言えばいいえ」「いいえ」と答える児童の割合が他の質問項目と比べて多い結果であった。児童の自由記述を見ると、「ノートを取るのが面倒くさい」「字を書くのが苦手」「どう書けばいいのかわからない」など、ノートをどう使って学習を行えばいいのかわかっていない児童や、書くこと自体に苦手意識を持っている児童が多い結果となっていた。ノートの書き取りが楽しいと答える児童も多いが、その中でどのようにノートを使って学習をすればいいのかわからない児童もいる。自力解決の場面でノートを前の学習の振り返りに使うことや、交流の場面でノートを使って友だちの考えをメモすることで理解しやすくなることを伝えながら、ノートの活用方法について研究推進部会を中心に改善に努め指導を行っていきたい。

「児童の学習のつまずきの改善に向けて」



前年度に実施した「つまずき診断テスト」の結果から「数量関係」「図・表に関わる単元」を重点単元として各学年の研究授業で取り組んできたが、2学期末に実施した「滋賀県基礎計算力テスト」における4年生、5年生、6年生のテスト結果を分析したところ、上記のような結果が得られた。「数量関係」の領域によるテスト結果では、正答率が誤答率を上回っていたが、「図形」領域においては、誤答率の方が上回っている学年もあった。特に、作図問題において、どの学年も誤答も無解答も多い結果であった。他にも、全体的に正答率が低く、活用問題については、どの学年も苦手意識を持っているということが分かった。このことから、基礎的な計算問題を中心に指導するということを大事にしながら、活用問題への取組も意識的に取り入れ、考えを伝え、学び合っていく経験を積み上げていく必要があるように感じた。また、4年生以前の学年においても、「量的な思考判断」、「作図」、「活用問題」などに関わる系統的な指導が必要である。既習内容も含めた系統性を考えた学習指導計画を、全教員で共通理解し取り組んでいきたい。